

2018年度 研究室活動記録

オープンラボ記録

本年度のオープンラボは1日、1回のみ行われ、院生によるコース紹介と個別相談を実施した。

<実施概要>

◆日時：2018年5月23日(水) 17:30-18:20

<コース紹介>

山田翔平(図書館情報学研究室)

楊映雪(社会教育学・生涯学習論研究室)

ワンデーセミナー記録

本年度も図書館情報学研究室と社会教育学研究室の研究交流を目的として、両研究室の大学院生とOB/OGが研究内容を発表した。

<実施概要>

◆日時：2018年9月4日(火) 10:00-17:00

◆会場：教育学部棟 158教室

◆発表者：中村百合子、尹敬勲、宮田玲、松田弥花

講義内容一覧

【生涯学習論基本研究Ⅱ】担当：教授・牧野 篤

本ゼミは、社会教育学・生涯学習論を研究するにあたっての基本的な視点の形成を目指すものである。担当教員である牧野篤の著書『社会づくりとしての学び—信頼を贈りあい、当事者性を復活する運動』(東京大学出版会、2018)をテキストとし、受講生が各自用意したコメントを発表する形式で議論を進めた。本ゼミでは、第一に本書が試みている社会教育学・生涯学習論研究の基本的な概念である「学び」の捉え直しについての、第二に学習主体としての個人の関係論的捉え直しという理論的な枠組みの実践分析への応用についての、理解と検討が中心的な課題となった。また、受講生各自の研究関心に引きつけて議論するという視点を導入することによって、本文献の多角的な読み方を受講生の間で交流させた。

【生涯学習論特殊研究Ⅲ】担当：准教授・李 正連

本授業では、日本で初めて教育福祉論を提唱した小川利夫の門下生である辻浩、松田武雄の文献(それぞれ①辻浩『現代教育福祉論』ミネルヴァ書房、2017、②松田武雄編著『社会教育福祉の諸相と課題—欧米とアジアの比較研究』大学教育出版、2015)を講読することによって、小川教育福祉論が現在どのように後の世代に継承され、そして発展しているのかを検討した。辻文献では、日本における教育福祉が今後どのように発展されていくことが望ましいかという問題について、理論のみならず現在の多様な実践との関わりのなかにもそのヒントがあるということを確認した。また松田文献では、海外での教育福祉の実践についても検討し視野を広げることによって、自明のこととして見落としてしまいがちな日本の教育福祉の姿を問い直す必要性を受講生は改めて認識することができた。また間に一回ゲストスピーカーを招き、まさに今大学で学んでいる理論と実際の活動としての実践をどうつなげることができるのかを試みることもできた。

【生涯学習論特殊研究Ⅳ】担当：准教授・新藤 浩伸

本ゼミでは、文献講読を通して、1960年代に展開された生涯教育論について、通説的な理解を疑いながらより深めていくこと、生涯学習とは何かということの理解を深めることが目指された。佐藤一子『現代社会教育学』を講読したのち、ポール・ラングラン著、波多野完治訳『生涯教育入門』(1976-79)、エッソーレ・ジェルピ著、前平泰志訳『生涯教育—抑圧と解放の弁証法』(1983)、パウロ・フレイレ著、三砂ちづる訳『被抑圧者の教育学』(2018)を通読し、執筆当時の社会状況や、思想的背景となる筆者の実践なども視野に入れながら検討した。従来の成人教育論や日本の社会教育論との相違について、また彼らの論が現代においてどのような意味を持つかについて、ゼミ参加者の研究関心とも関わらせながら議論が進められた。

【持続可能な開発のための教育】担当：非常勤講師・朝岡 幸彦

本講義では、東京農工大学農学研究院の朝岡幸彦教授を講師に招き、持続可能な社会を構築するために様々な教育課題が連携した未来志向型の教育的アプローチである「持続可能な開発のための教育

(ESD)」について議論した。

講義の前半では、講師の著作を参照しつつ、ESD 概念の基本的枠組みを確認した。また、2015年に採択された「持続可能な開発目標 (SDGs)」や、2018年5月に2審判決が出された九条俳句訴訟 (授業終了後の同年12月に最高裁が上告棄却し判決確定) など、近年の話題も取り上げられた。

講義の後半では、持続可能性を考えるうえでも多くの議論をもたらした福島第一原子力発電所事故を事例として、学校現場を想定した学習指導案の作成をおこなった。指導案の作成にあたっては、紙芝居やロールプレイングなどの教育方法を学習したほか、ESDの方向性につながる教育方法を内包している「ロケ的世界」の紹介もなされた。

こうした講義内容を踏まえ、最終回では「私の考えるESDの学習論」をテーマとした発表がなされ、履修者それぞれの研究分野に引き付けて活発な議論がおこなわれた。

【プログラム評価論】担当：非常勤講師・安田 節之

本授業は、S2の集中講義として開講された。前半は先生から問いかけてくる質問に対し、受講者が事前にテキストを読んだ上で討議しながら講義が行われた。内容として、なぜプログラムを評価する必要があるかについてから始まり、評価にあたって留意すべき点、評価に用いる手法、プログラム全体を可視化するための「ロジックモデル」という図表手法などを学んだ。後半はいくつかのグループに分かれて、受講者が講義の前半で学習した理論を実際に参画した活動や架空のイベントに活かしつつ検討した。グループの中で各自の検討課題となっていることを皆と共有し、また他のグループの方からの意見を取り入れ、専門分野の異なる受講者同士、相互に切磋琢磨して講義が進んだ。プログラムを実施する際には、とりわけプログラムの可視化によって体系的に行い、そしてそれに基づいて評価を行うことでアカウンタビリティ向上に繋がると期待される。授業全体を通して方法論だけではなく、受講者が持ってくる具体例を通してプログラムを実証的に評価するための手法を学んだ。

【生涯学習論論文指導】担当：教授・牧野 篤，准教授・李 正連，新藤 浩伸

本ゼミは、研究室に所属する大学院生が各自の研

究を報告し議論する場として開講されている。昨年度は、各タームにおける担当教員のゼミ最終日に行っていたが、より多くの院生の報告機会を確保する観点から、今年度は月に一度のペースで行なわれた。各回とも、学会発表や学位論文の執筆、各種紀要への投稿などを念頭におきつつ、研究構想やその具体的内容について有志の院生より報告がなされ、報告をもとに参加者全員で討論を行う有意義な時間であった。院生の研究テーマは多岐にわたり、本年度は、高齢社会における高齢者と学習に関する研究、国内外における地域社会・コミュニティに関する研究、学校と地域との関係を問う研究、社会教育施設と住民や行政との関わりについての研究などが報告された。報告や議論を通して、内容のみならず研究の進め方や意義についても検討が及び、各自の研究テーマにも示唆を与えるものとなった。

【図書館情報学総合研究】担当：教授・影浦 峯

通称「総合ゼミ」と呼ばれる本講義は、主に図書館情報学研究室所属大学院生が研究発表をする場です。基本的に隔週で開催され、毎回2名が研究進捗報告あるいは学会発表練習を行います。発表者は影浦峯教授、客員教授の海野敏氏、客員研究員の賀沢秀人氏および他の院生から質問と助言を受け、参加者全員が研究方法と内容について相互理解を深めます。発表者のテーマは台湾小学校の読書教育、大学図書館の蔵書、図書推薦システム、知識を構成する言語表現、発達性ディスレクシアとフォント、言語運用の適性、オンライン・ドキュメントのデザイン、数学的表現としての用語体系、一切経音義の文字情報、翻訳コンピテンス、災害時に外国人が直面する情報格差、外部資料の引用・参照、母語話者の言語運用、大学図書館のサブジェクトライブラリアン、公共劇場と多岐にわたります。また例年通り、最後のゼミで修論検討会が開催されました。

【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦 峯

本講義は研究室のメンバーが研究において必要な方法論を身につけるためのものである。本年は研究室のメンバーのテーマに合わせて4つのグループに分かれ、それぞれのグループでメンバーの研究内容に必要な方法論を学んだ。1つ目の技術系グループは主に自然言語処理を扱い、各自の研究分野の論文のうち、最新の研究内容が載った論文を各自で紹介

するという形で行われた。2 つ目の記述系グループはデータの観察などを基に事象を記述する研究を扱い、各自研究内容を説明することについて、先行研究のうち新たな方法論を説明した論文の説明の形式を学んだ。3 つ目の対人実証系グループは対人実験やインタビューなどを扱うグループで、佐藤郁哉著『社会調査の考え方』を講読し調査の方法論を学んだ。4 つ目のグループである翻訳系は翻訳に関する研究を扱うグループで1回につき2名の発表者が翻訳の方法論をめぐる、一つ主な文献を取り上げながら、その他の文献(3-5本程度)と関連させつつ、グループのメンバーの中で共有した。

【情報媒体構造論】担当：教授・影浦 峽

冬学期の情報媒体構造論ではテキストに Stephen Few 著 *Now You See It: Simple Visualization Techniques for Quantitative Analysis* を取り上げ、統計データに見られるパターンや着目したい特徴量を、人間の目に直感的な形で誤解なく提示するための視覚表現の使い方について理解を深めました。

授業ではあらかじめ指定された章ごとの内容を担当者が英語で発表し、それに対して主に英語で議論を行う形で進めました。形式は担当者の裁量に委ねられており、受講者に問題を投げかけたりソフトウェアによるデモを行ったりと多様な展開がみられました。

授業期間の全体をかけて同書の全章を読み終え、統計データの属性にはじまり、意味を抽出しやすくする整理のしかた、グラフの種類と特性、視覚情報の配分、グラフ上で有用な図形的な補助手段、グラフベースのさまざまな分析手法と読み取り方までを通して学びました。これにより、数値データの視覚化を通じて効果的に情報を発見・分析・伝達するために必要な知識を習得しました。

【図書館と情報資料】担当：客員教授・海野 敏

本講義は図書館と情報資料に関連するデータを収集し、それらを数量的に分析することによって知識の展開・記録・伝達・流通についての新たな知を得ることを目的とするものである。また、成果を学術論文あるいは学会論文として発表することを目標としている。

講義では12回にわたり統計解析の基礎、R言語、各種書誌データの構造、テキスト処理、ウェブスク

レイピングを学び、最終課題に取り組むための技術を身に付けた。最後の2回の講義では学生による最終課題の発表が行われた。最終課題のテーマは各自の関心に基づいており、「岩波文庫の絶版傾向」、「求人情報から見る外国語人材需要分布」、「岩波書店岩波ジュニア新書の分析」、「リハビリテーション専門職の問題意識とがんの臨床現場における問題意識」、「ベイズ統計に関する論文の調査」、「同一作家の著作と翻訳作の文体は異なるのか：青空文庫のデータを用いた初歩的な考察」、「言語処理学会採択論文のタイトルにおける単語の出現頻度」と多岐にわたった。

【デジタルドキュメント論】担当：非常勤講師・阿辺川 武

デジタルメディア上で配信・流通・利用・保存される情報を「デジタルドキュメント」と広く定義し、各種「デジタルドキュメント」について概要に関する講義と操作のための実習を通じて学習した。PDF・書誌・Wikipedia といったテーマについて学び、それらを構成しているデジタルドキュメントのコンピュータによる処理を、コマンドライン実行プログラム、及び Python プログラムで行った。また、応用的なテーマとして深層学習についても学んだ。単に様々なデジタルドキュメントの概要を知るだけでなく、実際にデジタルドキュメントの形式について、操作を加えながら学ぶことができた。授業の中盤では、教育 IT ソリューション EXPO に行く演習が組み込まれ、教育の現場で ICT が現在如何に用いられているかについて、それらを開発・設計した人たちの説明を受けながら知ることができた。

個人研究活動報告

(図書館情報学研究室 博士課程)

[中村 由香]

現在、生協総合研究所で研究員として働きながら、博士論文を執筆している。博士論文は「既婚女性の就業とネットワーク」をテーマとしており、今年度はこのテーマに関する論文執筆や学会発表を行った。

まず、既婚女性の就業の有無や就業者の雇用形態を規定する要因を分析し、その成果を「既婚女性の就業を規定する要因：「現代核家族調査、2008」を

用いた分析”としてまとめた。この論文は『参加者公募型二次分析研究会 夫婦データを用いた、家計、就業、子育てに関する二次分析 研究成果報告書』に収録された。

また、その大半が既婚女性で占められている福祉サービスの労働者に焦点をあて、労働環境の課題やその課題が生じる背景を明らかにする研究を行った。この成果については、オランダで7月に開催された International Conference of International Society for Third-Sector Researchにて、“The Marketization of the Voluntary Care Work in Third Sector: An Implication for Social Role of Volunteer Workers”というタイトルで口頭発表を行った。その後、発表内容を論文としてまとめ、それを収録した書籍が3月末までに刊行される予定である。

〔蘇 懿禎〕

本年度は博士論文『台湾の小学校における読書教育について—1950年代から2010年代にかけて』の執筆を中心としています。昨年、論文の章立てについて悩んでいましたが、先生に相談の上、調整ができました。主には、時期の区切りを学習指導要領の改正時点から、実際の読書教育発展状況へ変更しました。現在、第一章と第二章は初稿済みで、第三章を書いているところです。二人の司書教諭にインタビューしました。一人は現役で、一人は元小学校司書教諭のあと大学教授になり、今は退官された先生でした。大変貴重な資料を得て、今は整理中です。

博士論文のほか、ヨーロッパの絵本屋さんと児童図書館めぐりの旅について、本を出版しました。

【共著図書】

蘇懿禎・謝依玲『歐洲獵書八十天：插畫家×古繪本×繪本書店×兒童圖書館』台北，青林出版社，2019年1月，全263頁。（ヨーロッパ絵本狩り80日：イラストレーター×古絵本×絵本書店×児童図書館）

〔高橋 恵美子〕

本年度は、博士論文として、「日本における学校司書の配置と実践の歴史—専門性確立をめざす歩みの視点から—（仮題）」を執筆中、また査読論文として、「学校司書配置に関する各種調査の分析—調査結果が意味するもの—（仮題）」を執筆中である。

8月1日、神奈川県教育委員会主催の平成30年度生涯学習指導者研修「読書活動実践コース」第1回

において「子どもたちに楽しい読書を、子どもの読書活動推進のために」のタイトルで講演を行った。12月8日、中部図書館情報学会研究発表会「学校図書館職員の現状と問題点」の発表を行った。

日本図書館協会政策企画委員会専門職制度検討チームの一員として、報告書を作成中、また日本図書館協会学校図書館部会として、10月20日全国図書館大会分科会（学校図書館）を担当し、分科会の企画運営と報告作成を行った。

〔新井 庭子〕

本年度は、主に前年度に出した結果を発展させ、その結果を Cogsci2018（マディソン、7月）や READ2018（カイザースラテン、10月）において報告した。知識を構成するものとは何であり、またどのようにそれが構成されるのかという問いは、主に図書館情報学において問われてきた。それとは別に、知識がどのようにして受け取られるかという問題もあり、これは教育学や認知科学などで様々な形で検討されてきた。本研究の分析の背景にある問題は、この2つの問いに深く関係している。すなわち、体系的な知識を構成する言語表現上の特徴とは何であり、そして、それらは知識を伝えるという現実の要請を前提としたときに、それに応じてどのように変化するだろうか。これらの問いを念頭に置き、知識を構成する言語表現の特徴について、小学校5-6年生と中学校1-2年生の理科教科書を調べた。

〔矢田 峻太郎〕

昨年度3月から今年度5月の間、オーストラリア連邦科学産業研究機構（CSIRO）Data61部門（シドニー）に客員研究員として滞在する機会を得た。Cecile Paris グループリーダーの指導のもと、SNS（Twitter）上の発言から特定の対象への態度（スタンス）を抽出するための技術開発に取り組んだ。国際的多様性に富んだトップレベルの研究環境を経験でき、大変刺激的だった。この研究は博士論文テーマ「前読書家の読書を触発する図書推薦システム」と親和性が高く、成果を応用する予定である。帰国後は推薦システムに用いる「図書に言及する Tweets」の記述分析や、図書への言及が受け手の読みに与える影響の調査を行い、システム設計思想の妥当性を考察した。また研究室関係者との複数の共同研究に取り組み、渡邊晃一郎氏と会議論文を、宮田玲

氏・浅石卓真氏と雑誌論文を発表したほか、渡邊氏および唐麟源氏と NTCIR の Shared Task に参加した。

[山田 翔平]

今年度は、博士課程での研究テーマ「大学図書館の蔵書に見られる特徴の分析: 大学の位置づけを考慮して」に関する研究を進め、博士論文の執筆を行った。経済学部を有する大学に所蔵される経済学に関連のある蔵書について、大学を教育機能の別で分けて分析を行い、その結果を「大学図書館の蔵書の構成と学問領域の関連: 経済学に着目して」というタイトルで 2018 年度図書館情報学会春季研究集会にて発表した。この発表内容を再検討して博士論文の執筆を行ったほか、対象とする他の学部・大学を設定し、蔵書の分析を行い、博士論文の執筆を行った。

岩波新書の形式、形態について分析を行った“Physico-symbolic characteristics of Japanese paperback book series Shinsho: A descriptive study”が LIBRES に掲載された。これは、2016 年度に The 7th Asia-Pacific Conference on Library and Information Education and Practice にて発表を行った内容を構成し直したものである。

[朱 心茹]

昨年度に引き続き「発達性ディスレクシアに特化した和文書体と和文書体カスタマイズシステム」の研究を行っています。

これまでの研究で作成した和文書体の 1 回目の評価実験が完了しました。評価実験方法と書体作成について、2 月に筑波で開催された Association for Reading and Writing in Asia Annual Conference と 4 月にテルフォード (イギリス) で開催された British Dyslexia Association International Conference でポスター発表を行い、評価実験結果について、10 月にカイザーラウテルン (ドイツ) で開催された International Interdisciplinary Symposium on Reading Experience & Analysis of Documents で口頭発表を行いました。また、主に修士課程において行った研究「ディスレクシアに特化した欧文書体の特徴抽出」に関する雑誌論文を執筆しました。

上記研究と並行して進めていたモリサワとの共同

研究「UD デジタル教科書体の欧文フォントの可読性と視認性に関する研究」が終了しました。5 月に東京で開催された教育 IT ソリューション展ブース内で結果についてのミニセミナーを行った他、報告書に基づいて雑誌論文を執筆中です。

現段階の主な研究内容は、機械学習を利用した書体特徴の抽出と書体カスタマイズシステムの開発です。NII の佐藤真一教授と Phan Sang 博士のご指導のもと、ディスレクシア欧文書体の分類器の作成を行いました。また、Google の賀沢秀人博士と David Ha 氏からアドバイスをいただきながら、書体カスタマイズシステム等の開発にあたっています。

[唐 麟源]

今年度は、博士論文の執筆に向けた準備を行った。言語の規範的使用という大きな関心を背景に、日常用語と専門用語の使い方の差異をテーマにすることを決め、関連研究の整理に取り掛かった。研究分野として、自然言語処理における語義識別タスクに着目し、とりわけ意味変化タスクを立脚点とする。また、分析の言語資料として、法律用語辞典および新聞記事のデータの獲得と前処理を行った。これらの研究活動をまとめ、博士論文の執筆に着手する予定である。

[韓 尚珉]

本年度は、先行研究をレビューしながら研究の課題とリサーチ・クエスチョンを明確にし、研究資料のサンプルを使って実際に手を動かすことに重点を当てた。テーマは「日本語非母語者の読み理解のためのウェブ文書デザインに関する研究」とし、研究対象としてのウェブ文書は自治体がある手続きについてウェブ上で公示・説明している文書に定めた。

研究の予備調査として、二つの手続きに関した「日本の自治体のウェブ文書に対するドキュメント・デザイン分析」を行い、研究室総合ゼミで研究の概要と進捗、中間結果について発表した。分析終了後は重要要素を考慮したウェブ文書の設計と具現及び実証実験の準備に取り組む予定である。先行研究については、比較分析を行なった結果をまとめたレビュー論文を執筆し“Factors in the Reading Process that Affect Hypertext Comprehension”というタイトルで海外論文誌に投稿した。

〔陳 龍輝〕

昨年発表の提案に続いて、分散メソッドを用いながら、数学的表現としての用語体系の統合に関する研究を継続した。この目標に向け、用語ネットワークに関する先行研究に従って、用語データを基に構築した分散表現を作成した。

これに続き、複数の単語から成る用語の中からツリー-LSTM（長短期記憶）ネットワークを用いてより良い表現を引き出せるようにするための研究を追加で行った。このネットワークは係り受け解析（Dependency Parsing）ツリーの上に構築され、最終的な表現が翻訳に適用される。本研究は現在、計算言語学会北米支部 2019 年年次大会での発表を検討している。

〔王 一凡〕

本年度より本研究室の博士課程に入りました。現在は、研究対象とする慧琳撰一切経音義・希麟撰続一切経音義の文字情報分析に向けて、主に画像判定やデータ表現の手法について調査を進めています。研究室の各種ゼミ・活動に参加しながら、雰囲気や研究活動のペースに体を慣らしています。

外部活動は過去の研究内容や理論面の考察が主であり、5月に情報処理学会 CH 研究会でのポスター発表「グラフデータベースによる文書リポジトリ統合管理システムの設計」で学生奨励賞を受賞しました。6月にフランスの /gɹafematik/ でラテン文字に関する口頭発表、8月の日本言語学会夏季講座に参加、続いてシンポジウム「古辞書研究の射程」で一切経音義に関する口頭発表を行いました。また、今年度は TEI 関連の事柄が多く、6月にオーストリアの TEI サマースクールに参加、8月の CH 研究会、9月の TEI 2018 で和漢籍の TEI 化に関する口頭・ポスター発表を行いました。2月にも一切経音義に関する論文投稿および発表を予定しています。

〔朴 惠〕

本年度より博士課程に入学し、翻訳者を育成するために何をどのように教えればよいのかについて研究を行いました。

前期では、研究生の段階から始めた翻訳コンピテンスに関する文献レビューを引き続き行い、その結果を「翻訳コンピテンスとは何か、それほどのように規定されているか：翻訳教育カリキュラム開発に

向けたレビュー」という題目で日本通訳翻訳学会年次大会（関西大学）において口頭発表をしました。

後期では、韓尚珉氏・影浦峽教授との共同研究である「翻訳文を自己修正する際のメタ言語利用に関する研究」が倫理審査、予備実験、参加者募集を経て、2019年1月に本実験をスタートしました。年度内に実験を完了し、分析結果を2019年夏頃に学会で発表することを予定しています。

また、『日本翻訳ジャーナル』の連載コラム「キャンパスで学ぶ翻訳通訳」第2回を執筆し、北京大学日本語翻訳修士課程について紹介しました。

〔図書館情報学研究室 修士課程〕

〔BOURKE, Rebecca Louise〕

This year, I focused on completing my master's research, the outline and purpose of which I defined in the first year of my master's course. I also composed my graduate thesis (regarding aforementioned research) entitled "Toward an understanding of the 'information gap' faced by non-Japanese-speakers in crisis scenarios: based on tweets from the 2016 Kumamoto Earthquakes". In addition, I have begun writing a presentation of the findings from this research which I hope to present at a conference in the coming year.

〔名倉 早都季〕

修士課程を1年休学し、NGOでのインターンシップに従事した。研究活動としては、学部の卒業論文を再構成した投稿論文の執筆を行った。国語科教育における論理的思考概念をめぐる議論のレビュー論文である。執筆を進めるうちに卒業論文から内容が大幅に変更され、「国語科教育における言葉を使った論理的思考一体系性と具体性についての整理」と題して学会誌へ投稿した。また、休学期間を活かして、修士論文の直接の先行研究にはあたらぬが関連する書籍を読んだり、修士課程1年の際に不足を痛感していた初歩的な大学数学を勉強したりするなど、修士論文執筆に向けての準備をすることができた。来年度は復学し、「理由を説明するとは何か」というテーマで修士論文を執筆予定である。今後は勉強を継続しながら、研究を進めたい。

〔姚 依辰〕

今年度は4月より学際情報学府文化・人間コースの修士課程に入学しました。研究の内容として、入学から6月までは第二言語習得の観点から、非母語話者の発話にある「中間性」、「不完全性」に焦点を当てていましたが、7月以降は言語運用の社会的属性に重心を移し、現在は英字新聞の記事タイトルに使われている修辞手法を通して、英語の「ネイティブネス」(Nativeness)と能力(Competence)について考察をしており、母語話者の言語運用にある「正統性」(Orthodoxy)に問いかけています。

具体的な活動においては、2018年度前期では研究対象の明確化を主要な目標とし、発散的思考で研究の主旨と関わるいくつかの分野から文献調査を行いました。その上、図書館情報学研究方法論を受講し、対人系実験の方法論について認識を深めました。後期は主に研究の焦点を絞るために努めましたが、新聞記事での言語運用に興味を持つことになり、媒体と言表についての古典や先行研究を参照しながら、自身の研究着想に至った経緯を整理しつつ、研究の主張を確立できました。

〔渡邊 晃一朗〕

本年度4月より本研究科の修士課程に入学した。本年度は卒業論文で行なった引用についての研究を進展させ、“Characteristics of Sentences with References in Scholarly Papers: An Explorative Analysis”(影浦映教授、矢田峻太郎氏との共著)というタイトルで国際会議 SCIDOCA2018 に論文を投稿し、学会発表を行なった。また、5月より理化学研究所・革新知能統合研究センターでの研究アルバイトを開始した。これらの研究と並行して、線形代数などの基礎的な内容、また深層学習、データの可視化をはじめとする技術的な内容、研究テーマである引用の位置付けについての学習を進めた。その他には学部生向けの講義「教育資料調査法演習」にてティーチング・アシスタントを務めた。

(社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程)

〔大山 宏〕

本年度は昨年度から継続して青年の自立に関する研究を進め、日本社会教育学会第65回研究大会自由研究発表にて「高度経済成長期における都市青年の社会運動—日本都市青年会議の設立経緯と初期の関心を中心として—」として報告を行う予定であった(天候不順により会場校に到着できなかった)。また子ども・若者支援に関連する成果としては、2018年9月にエイデル研究所より発行された特定非営利活動法人日本子どもNPOセンター編『子どもNPO白書2018』に編集委員として関わり、「子ども・若者と地域社会をつなぐNPOの取り組み」(p.122-127)を執筆した他、昨年度まで板橋区教育委員会で勤務していた際の内容をまとめ、2018年8月発行の『東京23区の社会教育白書2018 いま知りたい伝えたい』に「子ども・若者支援の拠点としての社会教育施設～板橋区立生涯学習センター若者支援スペースi・youthの取り組みから～」として執筆している。

〔中川 友理絵〕

本年度より、出産・育児のための休学を経て、復学した。

研究活動として、社会教育の機関としての博物館のあり方をテーマに文献講読と資料の収集をおこなった。具体的には、社会教育関連雑誌の博物館に関する掲載記事において、1970年代から今日に至るまでの議論を概観し、伊藤寿朗の地域博物館論がどのような背景で形成され、また、学芸員の実践によってどのように展開されているのかに注目した。そのうえで、伊藤の地域博物館論を学芸員の役割から捉え直し、学芸員の専門性を検討するうえでの視座を得ることができた。

共同研究として、社会教育領域における子育て支援研究に関する資料の収集と勉強会をおこなった。また、サービス・ラーニングに関する文献講読、大学における地域貢献の取り組みについての情報収集をおこなった。

〔山口 香苗〕

今年度は主に、台湾の社区大学をテーマとした博士論文を執筆しました。また、台湾の生涯学習の2017-2018年の動向について執筆し、『東アジア社会教育研究』(第23号、2018年9月、p.130-144、

林忠賢と共同)に掲載しました。11月には韓国で開催された「第4回東アジア生涯学習研究フォーラム」に参加しました。フォーラムは、昨年度は佐賀県で行われ、今年で2年目の参加となり、東アジア(日本・中国・韓国・台湾)の社会教育・生涯学習研究者と、より深く交流することができました。8月からは長野県松本市との共同研究である公民館調査に参加し、松本市20地区の町会と町内公民館の聞き取り調査を行いました。

〔相良 好美〕

2018年4月に1年間の休学より復学し、博士課程の最終年度を迎えた。本年度は博士論文執筆に向けて、まず論文の核となる事例分析で援用する分析手法の精緻化を目指し、自主研究会での研究発表を重ねた。並行して先行研究における知見と課題の整理に取り組み、「ニューカマー青年研究の動向と展望―進路・移行をめぐる研究を中心に―」という研究題目で東京大学大学院教育学研究科紀要に投稿した。その他の研究活動では、東京大学高大接続研究開発センターCoREFユニットRAとして、初等中等教育における学習者中心の授業開発および評価手法の実践研究に従事した。

〔杉浦 ちなみ〕

以前から継続して、さまざまな方にお世話になりながら奄美大島の調査に取り組んでいます。今年度は資料調査に力をいれていました。その調査結果をもとに、学会報告や論文投稿にも挑みました。今後は、研究枠組みの検討・修正を重ねつつ、更に資料の分析を進め、博士論文の執筆へと着実に向かいたいと思います。

〔西川 昇吾〕

本年度は、「当為としての教育学的価値と労働に関する研究」という題目で、社会教育学会の自由研究発表に向けて準備を行った。戦後教育学は「当為の学問」として労働に対して価値的な議論を行ってきたが、今日その前提であったマルクス主義や、「教育学が目指すべき目標としての発達」概念そのものの妥当性が疑われつつあり、報告では、教育学が労働の意味づけや価値の問題についてどこまで論じることができるのかということについて改めて検討した。そして今後の展望として、労働を相互承認関係の中

で価値を生み出す行為、つまり「働くこと」としてとらえなおすことによって、人が働くということについて教育学的に論じうるのではないかということを示した。また、自主ゼミとして保育研究会を立ち上げ、幼児教育や子育て支援といった課題に対して、社会教育学が行うべきアプローチとはどのようなものであるかということについて検討した。

〔須藤 誠〕

本年度は1年休学し、首都圏内の自治体で社会教育指導員(非常勤職員)として勤務し社会教育実務経験を積むこととなった。春から秋にかけての体調不良も相俟って博士研究の進捗は乏しいものの、昨年度からの問題意識を引き継ぎ、これまでの教育実践(ことに社会教育実践)において人々に生起するところの時間意識がいかに措定されてきたのか、そしてそれが今日いかに変容しうるのか、という原理論的な問いに対して、「時間」「身体」や「空間」といった諸概念の検討をしながら応えようと試みた。その結果として析出された複数の論点については、これまでに各所で発表してきた内容を肉付けしつつ、来年度以降積極的に発表する所存である。

なお、昨年度から実施してきた共同研究の結果が、海外ジャーナルに掲載されることが決定した(Chie Fukui, Mahiro Fujisaki-Sueda-Sakai, Nobutada Yokouchi, Yuka Sumikawa, Fumika Horinuki, Ayako Baba, Makoto Suto, Hiroko Okada, Ryogo Ogino, Hyosook Park, Junichiro Okata, “Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafés” *Aging Clinical and Experimental Research* 誌への掲載決定)。

〔入江 優子〕

本年度も引き続き『『経済的に困難な家庭状況にある児童生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト(東京学芸大学)』に携わりながら研究を進めました。現在、その研究成果を基に学校及び教員養成系大学向けテキスト「子どもの貧困と教育」の分担執筆を進めています。また、主な研究活動報告は以下のとおりです。

【論文】

・“学校教育、家庭教育、社会教育の関係構造に関する今日的状況―困難な家庭状況にある子供たちを取り巻く教育環境に着目して―”『教育支援協働学研究』

vol. 1, 2019, p. 4-17. (掲載予定)

【学会発表】

・『『コミュニティ・スクール』から見た『チーム学校づくり』の課題』日本教育支援協働学会創立大会シンポジウム, 2018年6月3日

・「社会の構造変化からみた学校と地域の連携・協働政策の課題—学校区の社会経済的背景の多様性に着目して—」日本社会教育学会第65回研究大会(自由研究発表), 2018年10月6日

【詹 瞻】

博士課程以来の課題意識を引き継ぎ、個人研究では中国民国時代における蔡元培を中心とした「美育」理論について理論研究を行った。今年度は、昨年度の研究結果より蔡元培の理論が誕生した社会背景を整理し、さらに「美育」の展開の過程に関わった王国維と魯迅についてレビューした。その上、社会教育の視点から蔡元培の「美育」理論の当時の中国社会における意味付けについて検討し、当時共和制国家の形成期において、蔡元培、王国維、魯迅3人とも「美育」を通して、民衆の人格を高め、国力の増強による民族の独立へと主張することを明らかにした。その結果を、10月に日本社会教育学会第65回研究大会(名桜大学)において「蔡元培の美育理論とそれにかかわる人物に関する研究—王国維と魯迅を注目して—」という題名で自由発表を行った。

その他、千葉県柏市との共同企画である「キッズセミナー」にスタッフとして関与した。また牧野先生のもと、高齢者社会に関する海外論文の翻訳活動にも取り組んだ。

【堀本 暁洋】

引き続き、公共ホールと地域住民の関わりに着目し、公共ホールにおける学習の機能について研究を行っている。本年度は、1970年代以降に親子劇場運動が展開した公共ホール建設運動に着目し、活動内容の調査・検討を行った。その内容を日本社会教育学会第65回研究大会にて発表し、また日本社会教育学会紀要に投稿を行った。

また、東京都文京区のNPO法人「街ing本郷」の定例カフェへの参加と広報誌の執筆、千葉県柏市高柳地区でのキッズセミナーにて、楽器作り講座の講師の担当、長野県松本市との共同研究を行った。そのほか、地域文化研究会に参加し、地域の文化活

動について、また社会教育と文化の実践に深く関わってきた研究者、実践者についての調査・研究を行った。

【松尾 有美】

1年間の韓国での留学を終えて迎えた本年度は、博士論文の執筆にむけて自身の研究課題を形作り研磨していくことを目標としてきた。自分はどういう韓国社会を把握し、その中での子育て・育児支援をどのように描きたいのかということを考える上で、一度原点に立ち返り、修士論文のリライトを行なった。その結果としての論文を投稿し、掲載に至った。松尾有美 “공동육아에 대한 어머니들의 의식에 관한 고찰 —서울시 육아품앗이 단체 어머니들을 중심으로— (共同育児に対する母親の意識に関する考察 —ソウル市育児プマシ団体の母親を中心に)”, 『교육연구 (教育研究)』韓国公州大学教育研究所, 2018) p. 27-43.

8月からは研究室の松本共同研究のチームに加わり、松本市内の地区公民館の調査を月に一回のペースで行なっている。また東アジア社会教育研究会(TOAFaec)の活動にも韓国フォーラムの一員として参加し、韓国平生教育の一年動向を分担して執筆したり、定例会で留学報告会、そして昨年度から一年動向で担当している韓国障害者平生教育について簡単な報告を行ったりした。

【大野 公寛】

引き続き「学校と地域の関係」をテーマに研究を進めている。今年度は、「学校参加」を扱った先行研究において、地域の参加がどのように捉えられてきたのか、その構造を検討した。その内容は、2018年10月におこなわれた日本社会教育学会第65回研究大会で報告するとともに、本コース紀要に論文(「学校参加論の構造と課題—「地域」の「参加」を捉える研究の視角に着目して—)として投稿した。学校参加論以前の先行研究にも検討の対象を広げていきたい。

その他、昨年度に引き続き、岐阜市教育委員会との共同研究、文京区のまちづくりNPO「街ing本郷」の定例会への参加や広報誌の作成などの活動にかかわった。また、全国公民館連合会の実施する全国公民館実態調査事業に参画し、その準備を進めた。

〔丹田 桂太〕

本年度は、これまで明確に扱ってこなかった「地方」や「青年（若者）」と「社会教育」との関係に注目し、研究を進めた。まず、現代社会における「地方の若者」問題と「社会教育」との関係を問うた先行研究をレビューし、これらが「若者」の「成長」や「発達」を所与のものとして議論を展開している点を批判的に捉えた論稿を、第65回日本社会教育学会大会で報告した。また、社会教育研究においてかつて重要なテーマであった「青年」が、主として2000年代以降、「若者」として扱われるようになったその概念変化の理由を、戦後社会教育研究における「青年」概念の変遷を追うことから検討した論文を、社会教育学会のジャーナルに投稿した（2019年1月現在審査中）。

この他、昨年度に引き続き、岐阜県岐阜市教育委員会との共同研究および、東京都文京区のまちづくりNPOの活動に参加している。前者の共同研究については、昨年度の成果を報告書としてまとめ、発行した。さらに現在は、社団法人全国公民館連合会が5年に1度実施する全国の公民館に対する悉皆調査の調査票作成に取り組んでいる。

〔末光 翔〕

本年度より博士課程に進学した。修士課程に引き続き、精神障害者家族の学習のあり方、および学習への参加を通じた家族の価値観・行動変容のプロセスについて、「家族による家族学習会」プログラムとそれに関わる家族を対象に調査を続けている。

・修士論文の議論を整理し、「精神障害者家族の家族支援論に求められる視点の検討—『家族による家族学習会』の『事後の振り返り』場面に着目して—」を『東京大学大学院教育学研究科紀要』に投稿した（第58巻、2019年3月刊行予定）。上記論文では特に、家族が専門家や他の家族と対等な関係を形成する上で求められる「言説の資源」の状況に着目し、参与観察データの記述・分析を行った。

・本年度11月より、「家族による家族学習会」プログラムの普及に積極的に関わる家族若干名へ継続的なインタビューを行い、家族の人生経路図の作成を行っている。従来のケア論における「ケアを開く／ケアを閉じる」をめぐる議論を参照し、家族の価値観・行動の変容と学習参加との関連について検討を進めている。

〔野村 一貴〕

地域づくりと自然環境のかかわりについて関心をもち、とりわけ歴史的な空間認識がどのように表現され、受け継がれていくのかについての研究をおこなっている。これに関連して、9月より「科学技術インタープリター養成プログラム」にも所属し、副専攻として科学技術と地域社会の在り方についても調査を進めている。

研究室に関わる活動としては、8月に実施された一連のものづくりワークショップ（高山市「ものラボ高山キャンプ」ならびに岐阜市「ぎふサイエンス・キャンプ」）のスタッフとして参加した。同じく8月に柏市（高柳・豊四季）で実施されている「東大キッズセミナー」においても講師やスタッフをつとめた。このほか、正式なメンバーではないが松本市の共同研究においても初期のみ参加し、聞き取り調査や文字起こしなどを担当した。

これまでの研究業績等については個人ホームページに掲載する予定であるため、そちらを参照されたい。

〔林 忠賢〕

2018年度より博士課程に入学し、生涯学習基盤経営コースに配属された。同時に、リーディングプログラム・活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム（GLAFS）に参加している。来日して語学を勉強しながら、社会教育について一から勉強した。日本の院生生活に慣れるまでは少し時間がかかったが、初年度は以下のような活動を行った。

1. 発表：「日本における公共複合施設の現状と課題」第65回日本社会教育学会、2018年10月6日、名桜大学
2. 発表論文（査読付き）：[Chung-Hsien Lin](#)（共著）“Design Implications and Methodology Based on the Potential Needs of Seniors for Home Monitoring Systems”, 2018 Asian Conference on Design and Digital Engineering (ACDDE 2018)
3. 山口香苗・林忠賢「台湾の生涯学習・この一年」、『東アジア社会教育研究』第23号、2018年、p. 130-144.
4. 翻訳：①劉以慧、「教育から長期的ケアへ：高齢社会における学校と地域の実践の役割について」、『東アジア的観点からみた学校と地域の連携に対す

る展望』第4回東アジア生涯学習研究フォーラム，2018年，p. 225-233. ②小林文人「学校と地域の連携におけるマウル教育共同体の創造」、『東アジアの観点からみた学校と地域の連携に対する展望』，第4回東アジア生涯学習研究フォーラム，2018年，p. 259-266.

5. その他:8月にキッズセミナーの講座講師を担当。秋学期 A2 から新藤先生の学部ゼミ「社会教育学演習Ⅳ」の TA を担当し，授業の一環として昭島市公民館及び建設中の教育福祉総合センターでの調査を行った。

(社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程)

[松本 奈々子]

1年間の休学期間を経て，本年度10月より修士課程に復学した。

本年度は，修士論文「〈古い〉をめぐる学びに関する研究—飯田市華齢なる音楽祭を事例に一」の執筆に取り組んだ。

本論文では，国内外の高齢者・高齢期に関わる学習実践研究が，介護予防や医療・介護の専門職育成に注力しているなかで，高齢者が加齢現象への想像力を介しながら生活をつくる実践とそこにかかわる人々の語り注目する研究の枠組みと方法論の検討を試みた。そのために，老年社会学・社会教育学の理論を接続することで〈古い〉をめぐる学びという枠組みを提示し，飯田市華齢なる音楽祭という事例の調査による実証を行った。

[豊田 瑠璃]

本年度は，修士論文「喪失を伴う老いの生き方に関する探索的研究—神奈川県有料老人ホーム入居者を事例として—」の執筆に取り組んだ。従来の二極化した高齢者観を脱した像を模索するために，高齢者の日常の在り方を描きだすことを目的としたものである。有料老人ホーム入居者の9名を対象とした調査を行い，喪失を伴う老いに寂寥感や抵抗感を体験しながらも，老いや人生を二次的に経験していくことで受容し，日々の安定化を図り，また老いの制限を受け入れた上で関わろうという態度の中で，その志向性にその都度自己と他者を見出し続ける姿が浮かび上がった。

また，5月から8月にかけて研究室プロジェクトとしてのラボ JAPAN の活動に携わらせて頂いた。

[酒井 瑞生]

本年度より社会教育学・生涯学習論研究室に修士課程として入学し，社会教育学・生涯学習，教育社会学等の授業を受講しました。そのほか，学部時からの研究関心でもある高齢者に関連した授業を受講し，教育学的側面だけでなく，法・経済・医学等多角的な観点から学びました。

研究活動としては主に，来年度発刊予定の『シリーズ 超高齢社会のデザイン』の1章分を担当させて頂くことになり，その執筆に取り組みました。修士論文では引き続き高齢者を対象とした学習をテーマとすることを考えており，来年度に向けて基本的な文献や研究方法について検討しています。個人研究のほかには，研究室プロジェクトであるものラボ JAPAN の運営や松本市の共同研究に関わらせて頂きました。

[楊 映雪]

本年度より本研究室の修士課程に入学し，大学院博士課程リーディングプログラム(GPinG: GLAFS)でジェロントロジーを副専攻として履修し始めた。院ゼミや講義を通して，生涯学習の理論や思想，そして教育と福祉などについて学習した。また，R や Python の演習を通して，量的な研究方法やデータ作成技術の基礎を学習した。夏から自治公民館をベースにした新しいまちづくりの松本市共同研究に参加し始めた。個人研究としては，中国における NPO 団体と「互助論」に関心を持ち，今後更にテーマの絞り込みと調査を行う予定である。その他，①院生プロジェクトとして「キッズセミナー」の講師を担当した。②高山市・岐阜市で開催された「ものラボ」キャンプにてセンサー講師と運営スタッフを担当し，報告書を執筆した。③上海開放大学の決策諮問課題研究に参加し，雑誌『終身教育研究』にて共同論文を投稿した。

副専攻では，講義やセミナーで超高齢社会における現状や理論を勉強し，他専攻の院生との共同研究を行った。また，岩手県大槌町や鎌倉市大平山でのフィールド実習に赴き，ファシリテーターとして住民と触れ合いながら，地域づくりの課題について考える機会となった。

(社会教育学・生涯学習論研究室 研究生)

[金 亨善]

本年度より外国人研究生として入学し、博士課程進学に向けて研究の関心や課題を整理しつつ、生涯学習基盤経営コースのゼミと研究テーマにつながる他コースの授業を聴講した。研究の関心としては地域づくりにおける学校の位置づけである。主に日本の学校教育や生涯学習政策と地域づくりとの関係に関わる資料を中心に研究テーマのまとめ作業を行った。関連活動としては7月岐阜市共同ワークショップにファシリテーターとして参加し、8月柏第六小学校でのキッズセミナーではスタッフとして参加した。そして9月からは長野県松本市での「自治住民を基盤とした社会システム構築事業」の調査に参加している。その他、東京都世田谷区の「岡さんのいえ TOMO」にて、月一回の「岡'sキッチン」で地域住民や当事者たちとの交流を進め、区役所での振り返り会にも参加している。執筆活動としては『東アジア社会教育研究』第23号における「韓国の平生教育・この1年—2017年～2018年—」(p. 94-106)の共同執筆を行った。

学位論文

博士論文

2018年6月（課程博士）

満都拉

「中国高等教育における教養教育に関する実証的研究 ―グローバル化がもたらす教養教育の内的矛盾：北京大学「元培教育モデル」の検討を通して―」

2018年7月（論文博士）

小野寺夏生

「論文の被引用数と引用持続性の間の相互関係、及びそれらと他の論文特性との関係に関する研究」

2018年11月（課程博士）

園部友里恵

「インプロ実践がもたらす高齢者の〈古い〉のイメージの変容 ―高齢者インプロ集団「くるる即興劇団」を事例として―」

修士論文

2019年3月

Bourke, Rebecca Louise

“Toward an understanding of the ‘information gap’ faced by non-Japanese-speakers in crisis scenarios: based on tweets from the 2016 Kumamoto Earthquakes (災害時に非日本語話者が直面する『情報格差』の問題の理解へ向けて ―熊本地震時のツイートに基づいて)”

天沼亜沙子

「社会教育法における「文化的教養」の意味 ―立法当時の議論と今日的解釈―」

佐藤志保里

「環境保全型地域形成と住民の学習運動 ―宮城県北地域を例として―」

豊田瑠璃

「喪失を伴う老いの生き方に関する探索的研究 ―神奈川県介護付有料老人ホーム入居者を事例として―」

松本奈々子

「〈古い〉をめぐる学びに関する研究 ―飯田市華齢なる音楽祭を事例に一」

図書館情報学研究室教員・院生一覧

教授 影浦 峽

客員教授 海野 敏

客員研究員 賀沢 秀人

JSPS招聘教授 PARIS, Cecile

博士課程 中村 由香
蘇 懿禎
高橋 恵美子
志村 瑠璃
新井 庭子 (学環)
矢田 竣太郎
山田 翔平
朱 心茹
唐 麟源 (学環)
韓 尚珉
陳 龍輝 (学環)
王 一凡
朴 恵

修士課程 BOURKE, Rebecca (学環)
名倉 早都季
姚 依辰 (学環)
渡邊 晃一朗

研究生 曾 加

社会教育学・生涯学習論研究室教員・院生一覧

教授 牧野 篤

准教授 李 正連
新藤 浩伸

特任助教 松山 鮎子
古塚 典洋

博士課程 侯 婷婷
大山 宏
中川 友理絵
山口 香苗
相良 好美
杉浦 ちなみ
西川 昇吾
須藤 誠
松田 弥花
入江 優子
詹 瞻
堀本 暁洋
松尾 有美
大野 公寛
丹田 桂太
末光 翔
野村 一貴
林 忠賢

修士課程 栗田 智美
佐藤 志保里
松本 奈々子
天沼 亜沙子
岡本 知佳
豊田 瑠璃
酒井 瑞生
楊 映雪

研究生 金 亨善
唐 劍明
湯 博文